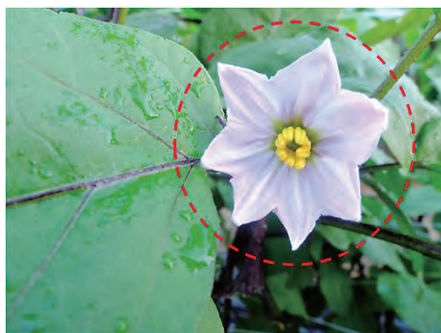


4 ホルモン処理

- ・トンネル被覆を行っている間は、風媒や虫媒での交配が期待できないため、トマトトーン等の植物ホルモンを雌しべに散布し人工交配を行う。
- ・トマトトーンの場合50倍に希釈し、1番花から4番花まで開花当日に処理を施す。
- ・ホルモン剤を2回以上処理すると奇形果等の原因となるため注意する。花の色の濃淡で処理済みかどうかを判断する。



頂芽や幼葉には避け、花のみに散布を行う



ホルモン処理はトンネルの側面に穴を開け、霧吹きノズルを差し込み散布する

灌水のポイント

- ・定植時の灌水で十分に土壌を湿らせておくことで、トンネルを設置している間は、ほとんど灌水は必要ない。
- ・トンネル内の表土の様子を見ながら、乾燥するようであればトンネルの穴から株元へ灌水する。
- ・トンネル除去後、生育初期は株元に、その後はマルチの下など根の広がりに合わせた場所に灌水する。
- ・乾燥が続くようであれば畝間に通水し、圃場全体に水を行き渡らせる。

5 整枝①

- ・主枝、1番花とその1節下位の側枝の3本仕立てとする。
- ・生育初期には、1番花より下位の葉を健康に保つことで、上位葉の生育を促進する。
- ・下位の葉は、色が抜け黄緑色になつてきたら側枝とともに除去する。

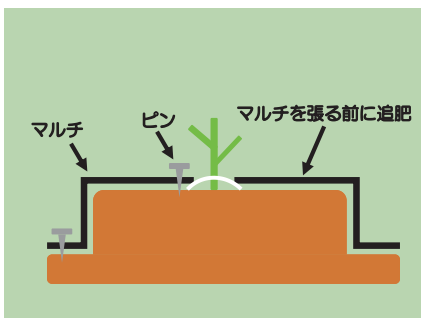
6 トンネル除去

【トンネル除去】

- ・5月下旬、葉がトンネルに触れ始めたならポリフィルム及びトンネル支柱を除去する。
- ・急な温度・湿度変化はナスに大きな負担をかけるため、トンネル除去までには、換気穴を20cm程度に広げ、外気に慣らしておく。

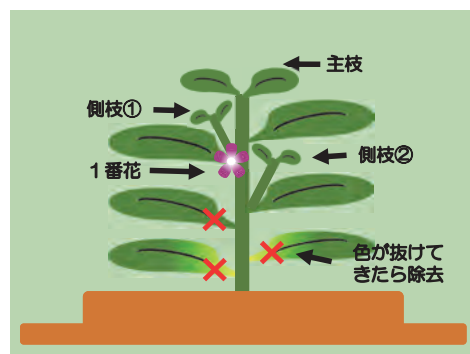
【はま合わせ】

- ・トンネルを除去した後、畝上に追肥を行う。
- ・黒マルチや稲ワラでマルチングを行う。
- ・黒マルチを使用する場合はピンで固定し、稲ワラは麻ひも等で固定する。



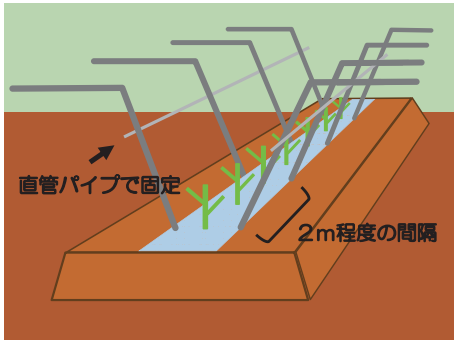
はま合わせのポイント

- ・マルチを張った後は雨水が入り込みにくくなるため、雨の後や灌水後にマルチングを行うと良い。
- ・次項のアーチパイプの設置作業と前後しても構わない。
- ・透明マルチの上も覆うよう黒マルチを掛け合わせると株元の雑草の発生も防ぐことができる。

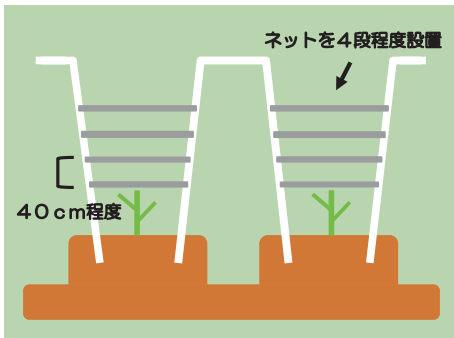


作業はトンネル内で行う

7 アーチパイプ設置



中央のマルチに沿ってアーチパイプを刺す
(注) はま合わせを先に行った場合は紐などを目印に真っ直ぐ

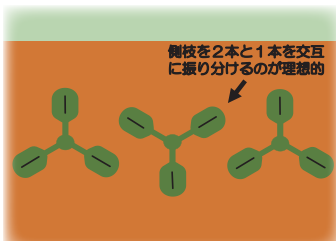


40 cm程度の間隔でネットを張る

上から 50 cm 程度のところに直管パイプを渡し固定する

- ・ナスの誘引は専用のアーチパイプを利用する。
- ・2 m 程度の間隔で畝を跨ぐようにパイプを刺す。
- ・アーチパイプの上から 50 cm 程度のところに、直管パイプを水平に固定する。
- ・株上のパイプ間に胡瓜ネットを4段程度張り、誘引を行っていく。

8 整枝②・誘引

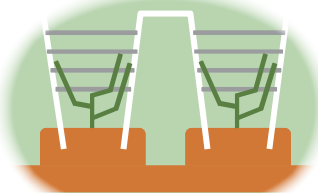


畝を上からみた様子



整枝作業の様子

(注) 葉が重ると下の葉は光合成の力が弱まるとともに、湿気が溜まり病気の原因となる



株全体に光が当たるようにネットに枝を通す



(注) 葉が混み合っていないければ無理に摘葉しなくて良い

整枝のポイント

- ・一度に多くの葉や枝を落とすと木に負担が掛かるため、1日に落とす葉数は3枚程度を目安にこまめに行う。

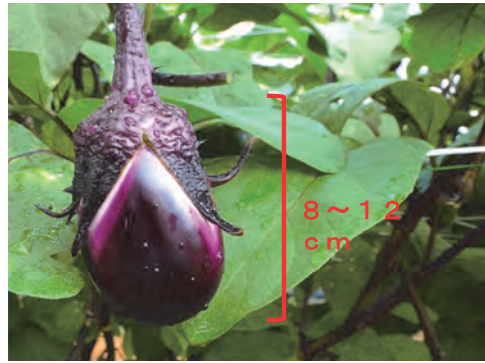
- ・3本仕立てを基本とし、側枝が畝の向きに対し垂直方向に交互に2本、1本となるよう株を振り分ける。枝の方向により、振り分けて負担が掛かるようであれば、無理のない範囲で誘引する。
- ・整枝作業は側枝の着果節位の上で摘心を行うことを基本とし、日当たりや風通しを考慮して、葉が重なり合わないように行う。

9 収穫

- ・ 収穫は早朝に行う。
- ・ 収穫物を傷つけないようにゴム手袋を着用する。
- ・ 収穫量の少ない日は、同時に整枝作業を行うと良い。



花托部を親指で
押すと、はさみ
を使わずに収穫
できる



8~12 cm程度で収穫



花落ち部分は病気の発生源になりやす
いため、できるだけ取り除く



コンテナを2個用意し、ナスと整枝後の茎葉
を分けておくと効率的

10 調整・出荷

- ・ 収穫後は、速やかに日の当たらない室内へ運び調整作業を行う。
- ・ 傷、虫害のあるものや、形の悪いものを取り除きながら、規格・階級ごとに丁寧に箱詰めを行う。
- ・ 箱詰め後は出荷まで日陰で保管する。



等階級別に箱を複数用意し、
選別と同時に箱詰めを行う



(注) 傷や変形のあるもの
は出荷できない



向きを揃え丁寧に並べていく



出荷まで日陰で保管



完成品

11 採種用母本選抜

- ・ 7月上旬頃に形や色つやの良い果実を選び目印をつける。
- ・ 1果から500粒程度採種できることを考慮し、必要数の果実を確保する。
- ・ 9月下旬頃（着果から約90日後）、果実色が黄味がかったきたら収穫を行う。



徐々に肥大



採種を行う果実に目印をつける



この程度に黄化したら収穫

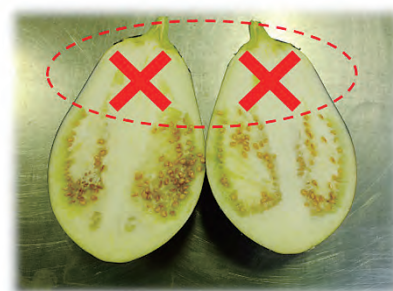
12 採種

【追熟】

種子の充実のため、収穫後1〜2週間程度は日陰で追熟を行う。

【採種】

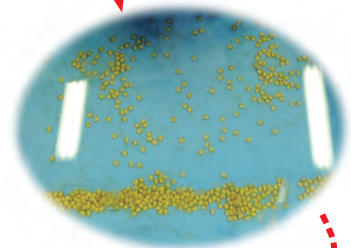
追熟後、果実が軟らかくなったことを確認し、種子を傷つけないよう手で裂いていく。
水を張った容器を用意し、断面を水で濡らしながら、指で種子を落としていく。
水に浮く種子は未熟である可能性が高いため取り除き、水に沈んだ種子だけを集める。
果肉等の不純物を取り除き、水気を取った後、日陰で乾燥させる。



種子の充実しない上部 1/3 は取り除く

【保存】

種子は、密閉されていない容器や紙封筒、布袋等に入れ、湿度40%以下、温度15度程度の環境下で保存する。
採種後、3年程度で発芽率が落ち始めるので、早めに使い切る。



13 片付け

- ・アーチパイプやマルチを撤去する。
- ・株を抜き圃場の外へ搬出し処分する。
- ・同じ圃場で同一の作物の栽培を続けると、連作障害が発生しやすくなる。連作は最長でも4〜5年とし、適正量での施肥管理、有機物の投入、客土や深耕等を行うことで連作障害を回避する。
- ・栽培を重ねると、徐々に下層の土壌が固まり、排水性が低下する。10年に1度は栽培終了後に、重機で深さ1m以上の天地返しを行う。下層の清潔な土壌を表土にし、下層土が軟らかくなることで、排水性が改善される。

連作障害

- ・特定の肥料成分が多かったり、不足した状態が続くと、微量要素の過剰症や欠乏症が発生する。
- ・特定の細菌やウイルスなどが土壌中に増加したり、特定の土壌害虫が生息地として定着することで、作物が侵される。

14 病虫害防除

- ・日常の収穫や管理と併せ、生育状況等を観察し、病虫害の早期発見と初期防除に努める。
- ・病虫害は、年によって発生 の程度に差はあるが、繰り返して発生するので、発生時期や防除実績を日誌等に記録し、翌年以降の防除に活かす。

- ・農薬は「野菜類」または「ナス」の登録のあるものを使用する。
- ・農薬の使用にあたっては、最新情報入手するとともに、ラベルの記載内容を必ず確認して使用する。

- ・農薬の最新情報は、農林水産省「農薬コーナー」を参照。

URL: <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

【主な病気・害虫】



【オオタバコガ】

若齢幼虫は新芽や葉を食害し、中齢期以降は果実を食害し内部に侵入する

幼虫※

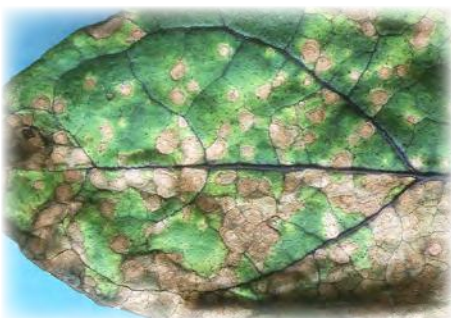


【ニジウヤホシテントウ】

成虫や幼虫が葉を食害する



成虫



【褐色円星病※】

葉のみに発生し、周縁が褐色、中心部が灰褐色の病斑が現れる



【青枯れ病】

葉色を保ったまま日中高温時の萎れとして症状が現れ、次第に萎れが回復しなくなる

※写真提供：森川 千春 （石川県農林総合研究センター農業試験場）

加賀野菜「ヘタ紫なす」栽培マニュアル

発行 平成30年3月

発行元 金沢市

監修 林 繁樹

編集 金沢市農業センター

金沢市下安原町東1471

電話 (076) 249-2744

FAX (076) 249-4470

